

新春テーマ随想 忘れられぬ映画

『プライベート・ライアン』

——渡辺 利夫

米国の中西部のある州の広い麦畑の一本道を、1台の軍用車が1軒の農家に向けて走る。4人の息子のうち上3人が世界各地の戦線で死亡、末子の二等兵ライアンだけがノルマンディ上陸に成功したものの敵地の中を彷徨っている。このことを母親に伝える軍用車である。近づくと軍用車を台所の窓からみつめる母親は、不吉な予感に胸を締め付けられ、玄関で報を受けるやその場に腰を落とす。

州の軍施設を訪れていた米参謀総長の判断により、母親の悲しみを癒すには8名の精鋭から成る小部隊を組んでライアンを救出し、母親のもとに返すより他なしと命令を下す。ライアンをドイツ戦線の奥深くまで探し求め何人も仲間を失いながらも、ついには発見にいたる。発見されたライアンは帰国に応



じず、部隊に加わってドイツ兵と戦う。1人の二等兵の救出に8人の勇猛な兵士を投入するという「不条理」である。この不条理の中に、戦争という人間の業の醜悪さと美しさの境界線が精細に描かれる。人間というものはどこまで愚かな存在で、どこまで高雅なる悲哀に満ちた存在なのか。極限状況の中で初めて露わになる両面的な人間存在のありようを、スピルバーグ監督は小部隊長を演じるトム・ハンクスの表情に微細に語らせている。トム・ハンクスはこの映画によって名優の座を手にしたのだが当然であろう。(拓殖大学学事顧問)